

データアプローチへの批判的評価  
——Digital Humanities at Oxford Summer School 2023 Humanities  
Data コースから——

A Critical Evaluation of Data Approaches: Insights from the Digital  
Humanities at Oxford Summer School 2023 Humanities Data Course

池田 美穂  
IKEDA, Miho

### 要旨

本稿は、Digital Humanities Oxford Summer School2023 の humanities Data コースに参加した経験とそこでの学びについてまとめたものである。デジタルヒューマニティーズの手法が研究にもたらす主観性と影響を理解し、それらをどのように研究に応用するかについて深く考察した。また、デジタル資料の管理と活用に関する FAIR 原則と CARE 原則を学び、研究データの整理、分析、共有における重要性と実践的な指針を得ることができた。

### Abstract

This paper provides a summary of my experience participating in the humanities data course at the Digital Humanities Oxford Summer School 2023. It delves into understanding the subjectivity and impact that digital humanities methodologies bring to research, exploring how these methodologies can be effectively applied. Additionally, it discusses the acquisition of knowledge on the management and utilization of digital materials through the FAIR (Findable, Accessible, Interoperable, Reusable) and CARE (Collective benefit, Authority to control, Responsibility, Ethics) principles, thereby obtaining crucial insights and practical guidelines for the organization, analysis, and sharing of research data.

### 1 はじめに

2023年7月3日～7日に開催された、Digital Humanities Oxford Summer School2023@キープルカレッジオクスフォード（以下、サマースクール）は、デジタルヒューマニティーズを学ぶための短期プログラムである。キャリアの段階を問わず、全世界各地から大学教員、研究者、学生、プロジェクトリーダー、IT 関連職、図書館や博物館、アーキビスト等、幅広い分野の参加者 100 名以上が集った。本レポートでは、このサマースクールに卓越大学院プログラムの一環として参加し、そこでの経験とデジタルヒューマニティーズを自身

の研究にどのように活用するか考えたことについてまとめる。

私がデジタルヒューマニティーズの分野に初めて出会ったのは、大学院修士課程に入学してからのことである。情報技術と人文科学の融合を基に、従来の研究方法に新しい視点でアプローチしていくという観点に興味と関心を持ってきた。修士課程での1年間は、そもそもデジタルヒューマニティーズはどのようなディシプリンであるのか、基礎部分を実践的に学修してきた。例えば、手法に関しては、KH コーダーによる計量テキスト分析や GIS による地理情報空間の分析、基礎的なプログラミングを学んだ。他にも、史料保存や分析の場面におけるデジタルアーカイブにおけるデジタルヒューマニティーズを学修してきた。

しかしながら、それらデジタルヒューマニティーズの研究や手法を、実際にどのように自身の研究に統合させることができるか、また、将来的な応用可能性についても検討ができていなかった。そこで、今回サマースクールでの目的は、デジタルヒューマニティーズが研究にもたらすインパクトを知り、その上で、今後自身の研究にどのように応用していくのかを考えるヒントを得ることであった。

事前準備としては、卓越大学院プログラム担当教員との面談を行い、適切な受講コースの選択、関連書籍の精読 Humanities Data のコースで必要なアプリケーションのダウンロードと試運転を行った。また、公開されているプログラム集を基に専門用語の訳語集の作成を行った上で講義に臨んだ。

## 2 Humanities Data コースの概要

本サマースクールでは、8つのコースがあり、自身の興味関心に合わせて事前に選択をする形式であり、選択したコースごとに教室で講義が行われた。今回は、Humanities Data のコースに参加した。Humanities Data コースは、3名のコーディネーターが順に講義を行う形式で構成されていた。本コースの受講生は20名程度で、研究者や大学教員のみならず、図書館員や研究者をサポートするアシスタントの参加者もいた。

このコースは人文科学研究プロジェクトにおける資料素材 (source materials) をより効果的に使用するための取り組みについて焦点を当てており、講義と演習を組み合わせた形態であった。具体的には、人文科学のデータを扱う際の基準や手法、ツールの選択を適切に行うことの重要性、そして、適切な収集をテーマとしていた。

講義の中では、具体的なデータの収集、データ検索、整理方法、処理、提示方法についてツールを活用しながら学んでいった。演習で使用したツールは、Gephi、OpenRefine、GIS の3点である。まず、講義による DH 技術の理論や要素の説明があり、その後アプリケーションの使用方法についてレクチャーで実際に使用しながら演習問題を解く形であった。

特に興味深かった講義は、Neil Jefferies による人文科学データアプローチの批判的評価の講義であった。この講義は、そもそもなぜ、デジタルヒューマニティーズ的アプローチを学ぶのか、また、なぜ、伝統的な人文科学のフィールドに取り入れる必要があるの

かという内容であった。

そもそも、デジタルヒューマニティーズには様々な技術や手法が存在する中で、真に中立的なツールは存在しておらず、それらを作成した人々の主観的な意図が含まれているという話から講義はスタートした。例えば、どのような順番で検索結果を表示しているのか、そのデータベースで扱う資料はどのようにデジタル化の対象として選択しているのかといった情報抽出の際の判断などが挙げられた。だからこそ、研究において資料を収集する際には、そのツール作成者の主観性を踏まえる必要があり、それぞれのツールがどのように構築され、どのような仕組みで検索結果が提示されるのかを知らなければならないと説明がであった。「どのような」文献を集めるかを重視し「どのように」文献を収集するべきかという視点は自身の研究にも取り入れていきたい。デジタルヒューマニティーズといえ、その手法を取り入れることに目が向きがちであった。しかし、この講義からは、デジタルヒューマニティーズ的な考え方や概念を研究に取り入れる形でも活用、応用していくことができるのではないかという学びを得ることができた。

さらに、講義の中では、メタデータのオントロジーや分類法、持続可能な識別子 (DOI, ORCID) と API に関して、デジタルリソースの保存、アクセス、再利用に関しての実践的な指針も提示された。そこで、FAIR 原則と CARE 原則についての紹介があった。FAIR とは、Findable, Accessible, Interoperable, Reusable の頭文字をとったもので、CARE とは、Collective benefit, Authority to control, Responsibility, Ethics の頭文字をとったものである。これらは、デジタル資料の検索可能性、アクセシビリティ、相互運用、再利用を改善するためのガイドラインを提供するための考え方である。今後、多くの資料がデジタル化していく中で、これらの原則は研究データをより責任ある方法で管理していくためにも重要な概念であると説明があった。この視点は、自身が社会調査を設計・実施する上でも意識することが必要なものである。データがどのように構造化され、どのように意味づけられるべきか理解していれば、研究データの整理と分析に役立てることができるだろう。他にも、個人ではなく複数人で研究を行う際のデータ共有するための基盤を構築できていれば、データの相互運用性が向上するだけでなく、より複雑な分析が可能となるだろう。そして、これらを実践することは、再現性を確保するために重要である。

サマースクールからは、実践的なツールの活用法を学ぶことができた。人文学と社会科学は、研究の目的、手法、目的、メタデータの付与等様々な点において、異なる位置づけを持っている。しかしながら、デジタルヒューマニティーズの考え方を研究に適切に取り入れることで、より再現性の高い研究になるのではないかという、今後の研究への応用のヒントを得ることができた。

(いけだ みほ 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)